

情報機器がつなく現代家族の絆 ポスト共住・共食を超えた家族コミュニケーション

生活研究部 副主任研究員 岸田 宏司

<要 旨>

1. 近年、コンピュータや通信技術を始めとする電子装置の発達と、その地球規模での普及にともなって、情報化は、人類社会の大きな流れとなってきている。その影響が、企業だけでなく、家庭にも様々な形でおし寄せており、家庭の情報化が、家族の人間関係のありように大きな影響を与えている。本稿では、共住、共食が崩れる現代家庭に情報装置が導入されるとき、その家庭にはどのような変化が起こるかという視点から現代家族像へのアプローチを試みた。
2. 家族がそれぞれ個人としての生活の場を持つようになり、家族との対面コミュニケーションが希薄になっても、留守番電話、ポケットベル、パソコン通信などの情報機器がバラバラに生活する家族をつなく道具として有効に機能している。家族は、一緒の場所に住めなくとも電話回線上に家族をつなくネットワークを築き始めている。
3. ハイテク機器で重装備された共働き家庭では、ハイテク機器による家事の徹底した合理化と情報機器による家族の情報ネットワーク化によって、夫婦で共に働き、共に家事・育児をする性別役割分業を超えた家族関係を維持している。情報機器は家族間のコミュニケーションにだけ機能するのではなく、家族の形態にまで影響している。
4. 家庭にハイテク情報機器を持ち込むことによって、家庭と職場の境界線が無くなり、家庭における夫婦間コミュニケーションの時間が奪われたり、家族が知らない情報機器を独自で夫が仕事で持ったことによって、家族以外の人とのコミュニケーションが手軽になり、その結果、冷えかけた夫婦関係を完全に崩壊させるなど、情報機器が家族の求心力を強める方向に機能せずに、反対に弱める方向に機能した家族もあった。
5. 大量に家庭に入り込んだ情報機器が家庭の人間関係に与える影響を事例調査結果を統合してみると、情報機器には、次の三つの機能があることが明らかになった。一つは、離れて暮らす「家族を結びつける機能」、二つ目は、家族間の情報機器によるネットワークの構築によって家族の自立性を確保する「家族を個人化する機能」である。三つめは、情報機器やホームセキュリティシステムや食器洗い機などのハイテク家電を使うことで、夫婦の性別役割分業が事実上形骸化し、結果的に従来の家族観を払拭する「家族を再構築する機能」である。そして、注意すべき点として、情報機器は、その使い方によっても家族関係を維持する方向ではなく、全く逆の家族をバラバラにする方向に機能するも明らかになった。

はじめに

社会経済の環境変化が進む中で、社会を構成する基本的単位である家族も、その形態、機能等が大きく変化してきている。とりわけ、戦後の高度経済成長期の大きな社会変動の中で、社会的存在としての家族の視点がより重要性を増してきた。終戦直後に制定された新憲法、新民法によって家制度は解体し、男女平等の理念を基盤とした新しい家族のあり方が模索された。戦後の家族は、こうした制度上の変化に加え、産業化に代表される社会経済面での変化と深く関わりあいながら、その社会の変動に対応してきたといえる。

そして今日、経済のグローバル化・ボーダレス化、政治の大きな変化、高齢化に拍車をかける出生率の低下、経済成長の鈍化等、これまでの社会システムを支えてきた様々な社会環境に大きな変化が始まっている。こうした社会の変化の中で、家族の今の姿を客観的に捉えるとともに、そこに起こりつつある変化の芽をみる目的で、ニッセイ基礎研究所では、平成四年から二カ年計画で家族の研究を行ってきた。

家族研究には、「サラリーマンの仕事と家庭」、「子どもの目を通して見た家族像」「都市の家族とパーソナル・ネットワーク」、「情報化による家族の変容」、「高齢期の親子関係」の5つの研究テーマがあり、本稿はこれらの中の「情報化による家族の変容」の研究結果を中心に他の研究成果も若干取り込みながらまとめたものである。

1994年は、国連が提唱する国際家族年にあたり、国際的にも家族問題への関心が高まっているところである。「情報化」をキーワードにして、家族が今どこに向かおうとしているのか、調査結果をもとにご紹介する。

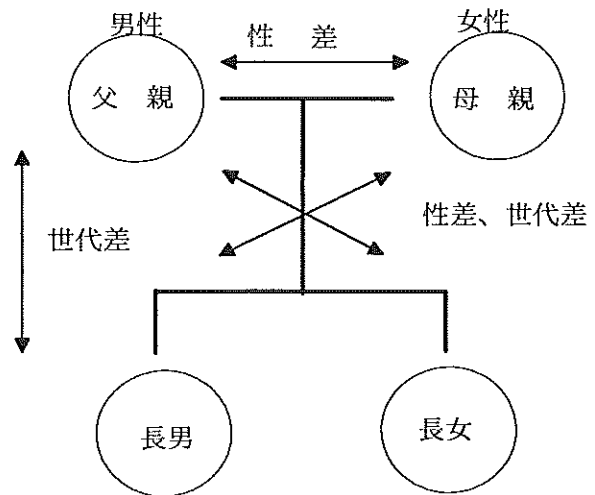
1. 現代家族の諸相

(1) 異文化が一つにまとまった家族

家族は、性、世代を超えた組織である。夫婦間

では性が異なり、親子間では世代が異なる。親世代が過ごした青春時代は、今、子どもが経験している青春時代とはまったく別の社会を背景にした文化で形成されているのである。家族が生活する家庭という場は、異なる性と異なる世代のそれぞれの文化が、ぶつかり合いながら渾然一体ととなって形成される空間である。家族といえば、同質であるという認識をしがちであるが、家族とはきわめて異質性の高い組織と言えよう(図1)。

図-1 家族の中の異質性



家族が家族の異なる文化を超えてひとつの組織として求心力を保つためには、やはり家族一人一人が、それぞれが持つ文化的なギャップを理解し、家族独自の文化を創造し、共有することが重要な鍵になるのではないだろうか。特に、時代の流れが速い現代では、世代ごとに形成される価値観、文化の変化が速く、家族内のギャップを乗り越えていこうとする家族間の努力がなければ、家族を維持することすら難しくなっているようである。父親が生活時間の大半を会社で過ごし、会社文化の中だけで生活していると、母子間に築かれた家族文化の中に取り残され、家の中で浦島太郎として扱われることにもなりかねない。

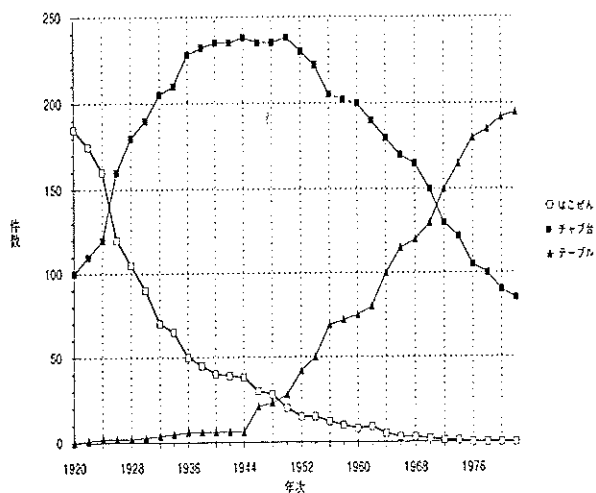
家族が家族間の異質性を理解するという事は、父親を父親という役割機能だけで理解することではなく、父親が生きてきた時代、社会を家族が理

解するということである。人には、生物としての年齢の他に社会から判断される社会的な年齢、さらに時代の変化とともに生きてきた生活年齢があり、父親の生きてきた時代、社会を理解することは、父親の歩んだライフコースに目を向けることである。子どもを理解するということも父親の場合とまったく同様に、生物学的な年齢としてみるのではなく、子どもの育っている社会、時代を理解することが、重要である。

(2) 共住・共食の変化

わが国の食卓はかつては箱膳で、食べ物は盛り分けられていた。盛り分けには性差、年齢差があり、食事の場は家長である父親が取り仕切った。しかし、現在の食卓は箱膳から卓袱台（ちゃぶだい）になり、テーブルへと変わった。食事をする道具が、箱膳からテーブルに変わることで、食事の方法も変わり、食事の盛り分けも箱膳の頃に比べれば、それほど厳密にされることはない（図2）。

図-2 食卓形態の移り変わり



出所：石毛直道・井上忠司『現代日本における家庭と食卓—銘々膳からちゃぶ台へ—』国立民族博物館研究報告別冊16号1991年

銘々膳での食事風景は、家長である父親が上座に座り、食事でも会話も取り仕切っていた。そして食事中に談笑するということが無かったようである。今のように家族がリラックスして食事と会話

を楽しむという風景からすれば、想像できないことである。

戦後、民法の改正と共に家制度は廃止され、食卓の形態も卓袱台やテーブルの出現によって徐々に変化し、食卓が家族の重要なコミュニケーションの場として使われるようになってくる。しかし、現代では、家庭の中で食事時間がずればはじめ、4人家族で夕食が4回という家庭も珍しくなくなっている。たとえば、中学生の長男は塾に行くため5時頃に食事をし、妻が7時頃に一人で食事をす。大学に通う娘がアルバイトを終えて9時頃一人で食事をし、夫は残業で10時頃に帰宅してそれから食事をとるという具合である。

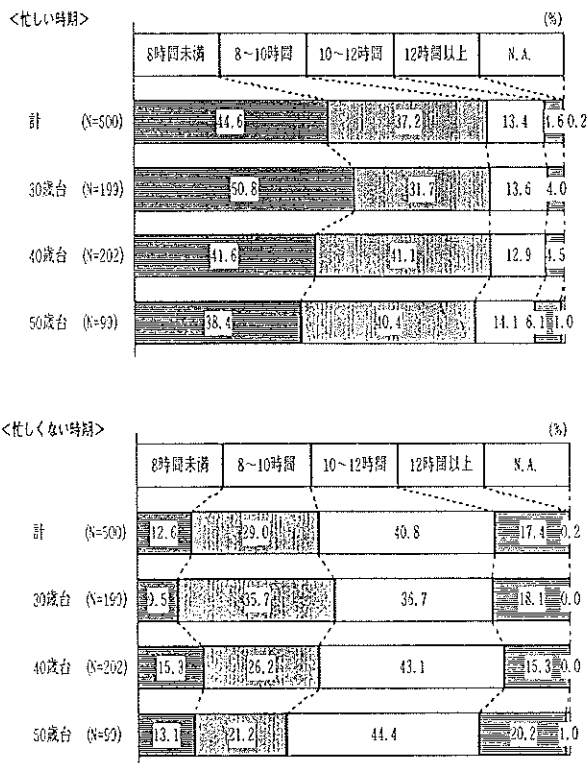
家族と一緒に食事することが、週末だけに限定されるようになり、食卓も日常的なコミュニケーションの場から、週に一回のハレの食事の場に変わりつつある。個食の日常化が、家族による共食を非日常的な行事に変えてしまっているのである。

食事だけではない、一緒に住まうことも変わってきている。父親が単身赴任で地方に住み、子どもは留学や学校の寮に入り、家には母親が家の管理のために一人で住むという具合である。このように家族がまったく別の場所に住むという状況でなくとも、仕事で夜遅く帰宅し、朝早く出勤する父親と他の家族との生活時間が完全にズレてしまい、同じ屋根の下に住んでいても実質的に共住とは呼べない状況にある家族は多い（図3、注1）。

一緒に住まい、一緒に食を供にすることは、物理的にコミュニケーション時間が増える分、家族間で共有する情報を増やす効果を持つ。そして、共住、共食によって家族の団らんが生まれ、結果として家族の絆を強化する機会が増えることになる。

現代家族の場合は、家族の生活にとって当たり前と思われてきた共住、共食という生活スタイルが崩れだし、当たり前のことで無くなったために、家族関係を維持するのに家族らしさを維持する装置が必要になってきているのではないだろうか。

図-3 家庭で過ごす時間



出所：「サラリーマンの仕事と家庭」調査より「サラリーマンの家庭での在宅時間」

共住、共食を味わえるアウトドアライフが流行するのもこうした現代家族の悩みの裏返しかもしれない。仕事で在宅時間の短い父親が、子どもと共有する情報が少ないために、家族の中で取り残されてしまう状況が、子どもたちの書いた作文にあらわれている（注2）。

<父親に関する子どもの作文>

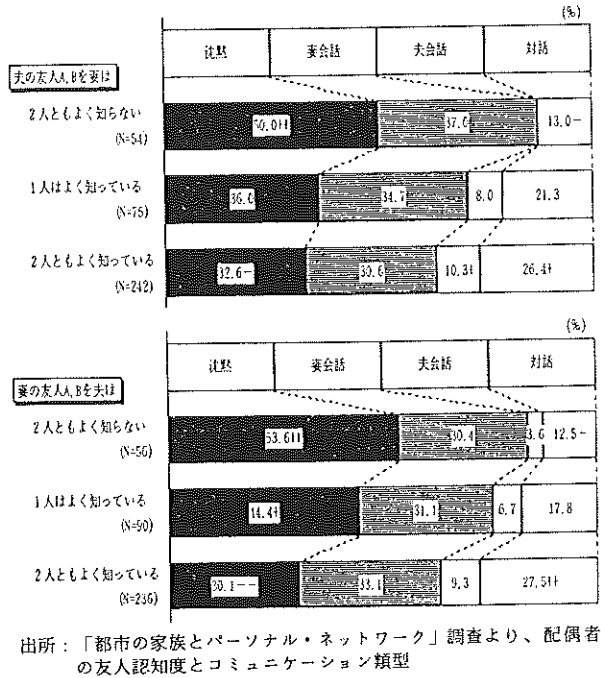
「父にいろんな話をしようとする、父の知らないことが沢山出てくるので話がなかなか進まない。だから話すことが少なくなっていくのかもしれない。」

「父さんは、毎日仕事で、夜おそくに帰ってきます。でも私がふりかえれば、お父さんがいないかもしれません。」

「いつも目立たない存在です。時には、居るのか居ないのかも分からないこともあります。だけど、ふと気づくといすに座ってテレビを見ていました。私は毎度おなじみの「何やってんの」という言葉がでてきます。時にはまじめに「テレビ見てんの」と言いますが、時にはふざけ半分で、「人間やってんの」など言います。いかにも暗い人生です。そんなお父さんといっしょにくらすお母さんは一体何だと思っているのかいつも不思議になります。（中略）お母さんとの喧嘩をとめようとするのがお父さんなのです。でも、いつも勝っているほうに味方します。気弱なのでしょうか。（中略）はっきりしないお父さんも良いと思っています。（中略）たまに、たばこをすって私がくさいとおこると、「もったいないからあと少し」と言います。貧乏性です。（中略）お父さんの存在ってよくわかんないけど、実はえんの下の力持ちだったりして――。」

先に述べたとおり、家族は異質性の高い組織である。家族の求心力となるような家族独自の文化を築くためには、家族一人一人が家族の異質性を理解しあうためのコミュニケーションの時間を確保することが不可欠である。夫婦間でも職場や家庭で築いた人間関係をお互いが認知し合っていないと、対話のない沈黙型の夫婦になってしまうことが、今回の家族研究のひとつ「都市の家族とパーソナル・ネットワーク調査（注3）」でも明らかになっている（図4）。家族と時間を共有することのできる共住、共食の機会の減少は、家族関係の維持にとって大きなマイナス要因になる危険性をはらんでいる。

図-4 友人の共有度と夫婦コミュニケーション類型



どのような状況にあれ、家族は一つにまとまろうと努力するものである。共住、共食が無くなった家庭でも、その努力を惜しまない家族は多い。生活時間の異なる家族間のコミュニケーションを電話回線の複数化によって補った家族、仕事の都合で離ればなれに住むことになった家族がパソコン通信を通じて別居のハンディを超えて親子関係を深めた家族など、以下に紹介する家族は、様々な工夫をしている。

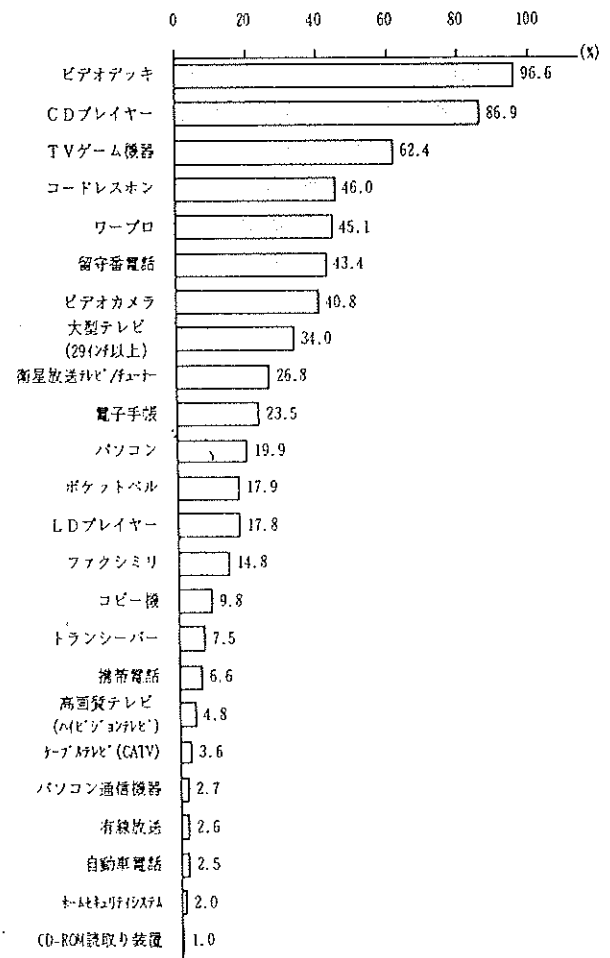
本稿では、すれ違う家族のコミュニケーションがどのようにして行われ、家族関係を維持しているかを、昨年10月に実施した「情報化と家庭生活に関する実態調査」結果をもとに紹介する(注4)。この調査は、アンケート調査と面接調査で構成されており、アンケートでは情報化が家族に与える影響について、面接調査では情報装置による新しい家族間のコミュニケーションを実現している先端事例について明らかにしている。以下では、事例を中心にアンケート結果を取り込みながら、現代家族の人間関係を紹介する。

2. 情報装置によって築かれる家族関係

(1) 家庭で使われている情報機器

まず、アンケート調査結果から現在の家庭で使われている情報機器についてみてみよう。家庭での普及率が高い情報機器は、ビデオ、CD、TVゲームなどである(図5)。これらの情報機器は、ソフトを介して機能する情報装置で、パッケージ系情報機器と呼ばれるものである。パッケージ系情報機器に次いで所有率が高い情報機器は、通信関連機器である。図に示すように、コードレスホン、留守番電話を利用している家庭は多いが、自動車電話、携帯電話などの移動電話については、2.5%と6.6%と、まだまだ家庭には入っていないようである。なお、電話については100%普及しているという前提で調査しており、ここでは

図-5 情報機器の普及率



多機能化した電話に絞って普及状況を尋ねた。

高校生の間で人気の出ているポケットベルの普及率は17.9%である。この普及率が高いか低いかという評価は困難であるが、他の機器の普及状況からみると、多数の人に普及するには、まだまだ時間がかかりそうである。というのは、情報機器は普及率が50%を超えると社会的な強制力が働き、急速に普及すると言われている。この点からすれば、ポケットベルの普及率はまだ低く、所有していないと生活上不便であると感じるほどの社会的強制力は生じていないといえよう。

一方、家庭での利用がそれほど進んでいない情報機器は、CD-ROM、ホームセキュリティシステムと先にも挙げた自動車電話である。また、パソコンユーザーの中で急速に利用が拡大しているパソコン通信であるが、パソコン通信用のモデムの利用率は、全家庭中1割に満たない結果となっている。

家庭に普及している情報装置をみると、電話関連の情報装置、テレビ関連の情報装置、オーディオ関連の情報装置の普及が高く、コンピュータ関連、移動体通信関連の情報機器は低いことがわかった。

(2) 回線を通して築かれる家族関係事例

次に、インタビュー調査結果から、共住、共食が形骸化する家庭の中で、充実した情報装置で家族関係を維持をしている「多回線家庭」と「パソコン通信家庭」を紹介する。

①「多回線家庭」上原家の事例

・上原家のライフスタイル

上原家は、夫婦と2人の子どもの4人家族である。夫は、ガラス繊維関係の営業部門の管理職である。単身赴任が長く、27年にわたる結婚生活のうち、大半は別居生活をしている。現在は同居しているが、仕事柄出張が多く、在宅時間は別居時代とほとんど変わらないという。また、交際ゴ

ルフも頻繁にあり、ゴルフバッグがゴルフ場からゴルフ場へと、宅配便で渡り歩くことも多い。夫は、出張先からこまめに特産品を自宅に送り、留守がちな家に対して自分の存在をアピールすることも忘れていない。

妻は、旺盛な行動力と幅広いネットワークで、これまで、女ばかりの居酒屋の経営に参加したり、家庭科の男女共修をめざす運動、単身者の生活権を検証する会、墓の問題を考える会など、さまざまな活動を展開している。私生活では、夫と自分の双方の親、4人の介護をしたこともあり、その経験から、高齢者向けファックス・サービスなどを提案したりもしている。

子供は二人おり、長女は大学の理工学部を卒業後、コンピュータ会社に就職、現在3年目を迎える。端末を操作するのは仕事だけと徹底し、自宅ではまったく情報機器とは無縁の生活で、パソコン通信などもしていない。

一方、長男の方は、私立大学3年生で、授業を受けるかたわら、アルバイトにも精を出している。現在は、カラオケBOXで週4日、午後6時から午前2時まで働いている。この上原家では、それぞれまったくばらばらの生活スタイルをもつため、家族全員が顔を合わせることは、週1、2回程度しかない。

・住環境

大田区にある古くからの住宅街の一角にある貸家式一戸建てに、10年近く居住している。賃貸住宅を選んでいるのは、家族のライフステージによって、居住スタイルを変えていくためには、一つに固定しないフローの住スタイルが便利という考え方によっている。

・情報環境

電話は家族共有の1回線、妻、息子がそれぞれ専用回線をもつ他、ファックス専用回線が1本あり、計4回線がある。さらに息子はポケットベル

を専用しており、パソコン、ファミコン、スーパーファミコンなど通信系の情報装置だけでなく、パッケージ系の情報装置も備えている。

・ライフステージの変化によって増えた電話回線
上原家に電話回線が増えていった軌跡は、家族のライフステージの変化と密接な関係がある。現在のような多回線型コミュニケーション形態が定着したのは、長男が高校を卒業し、アルバイトや友達とのつき合いで昼夜逆転の生活をするようになってからである。

家族共用の電話がリビングに1つ、妻と息子の部屋に専用電話が1つずつある。ファックスは妻の仕事用に購入したが、家族の文書伝達にも利用している。上原家も最初は、電話回線は1本だけだったが、6年くらい前に、仕事用でまず妻専用の回線を1本増やした。それから息子が中学の頃、パソコン通信をするので、回線はそのまま部屋に引き込みを増やした。それから、家族が個別に電話を持つ「個電」スタイルが始まった。現在は、息子の部屋には専用電話が1台と、親子電話の子機が1台ある。

息子に専用電話を入れたのは、息子が大学に入ってアルバイトをするようになり、家を空けることが多くなったからである。友達との連絡は、みんな互いにアルバイトをしており、留守番電話にポケットベルの番号をメッセージしておいて連絡している。

子どもが小さい頃のコミュニケーション手段は、もっぱら冷蔵庫の扉にはりつけるメッセージであった。家族が一度帰宅してから、ふたたび外出するという行動パターンのときは、冷蔵庫メッセージが効果的だった。しかし、大人になって行動範囲も広くなり、自宅を一度経由しないで、いったん出たらそのまま次の行動をするようになると移動から移動の生活で連絡のとれる情報システムが必要になった。留守番電話は声の伝言板として利用されている。

・留守電とポケットベルの組み合わせは、家族の連絡用にも活用されている

息子の部屋の留守電に、親からメッセージが入っている。緊急の場合は、ポケットベルに自宅の電話番号が入り、息子から母の仕事先に電話して用件を聞いたりする。ただし、ポケットベルはたしかに効果的だが、向こうの状態が分からないため緊急時以外は使わない。特に息子は、頻りに留守電を出先から確認しており、留守番電話での連絡が一番信頼性が高い。

息子へのメッセージは、家族で行動するときなどの連絡に使う。妻と娘が合意しても、息子はほとんどいないため、たとえば現地で合流するにしても、息子に確認を取らなくてはならない。このようなケースでもポケットベルで呼び出すほどの緊急性はないため、そのときは留守番電話に連絡事項を入れておくことでコミュニケーションをとるようにしている。いわば、留守電で家族会議に参加する形である。時差のある家族会議である。

・多回線は共住、共食のない家族の絆とを築くのか

多回線という情報システムでつながれた家族のコミュニケーションは、はたして求心性をもつのか、それとも家族を拡散させる方向に機能するのであろうか。上原氏は、「それぞれの秘密を尊重するという意味で、家族を大事にするコミュニケーション」という。

母と息子がそれぞれ回線をもっているのは、お互いに秘密が多いことが理由である。つきあいが多くて、家族共用の電話では困る相手を多数もっており、相手によっては失礼になることもある。かつては、親子ともどもお互いの交友関係がわかっていたが、それぞれ交際範囲が広がっており、全部わかろうとするのは不可能になっている。かかってきた相手との人間関係がわからないと、うまく伝言できないことも多い。

この家庭のようなやり方は、家族をバラバラに

する危険性を持つように見えるが、上原家では家族を大切にコミュニケーションツールとして機能している。たとえばこんなエピソードがある。

「家族の大代表に息子の友人と称する人物から電話がかかってきた。本来友達なら直接彼の専用番号にかけるはずのものが、そうではないとするとこれはあまり親しい人間ではないなと見当がつく。案の定、テレホンセールスかなんかであった。」

妻個人の専用電話にかかってきた電話には、たとえ家に居ても家族は出なくてよいことになっている。あくまでも妻の仕事の用件でかかってくるのであり、家族をまきこみたくないという配慮からである。いろいろな仕事をしている妻のところには、セクハラも含めて、いろいろな電話がかかってくる。こういった電話を通した外部からの侵入者から家族を守るためにも、この家のコミュニケーション形態は、家族全員にとって使い勝手の良いシステムとなっている。だいたい夫は、会社に仕事専用のプライベート電話をもっているわけであり、仕事する主婦が家庭に専用電話を持つのは当然であるという認識である。

・家族の維持にコストがかかる

息子の月々使う電話料は高くなく、基本料を入れても月 5000 円程度である。もらい電話専用にし、自分の部屋の電話で自分からかけることは少ないためである。これは小さいときからの親の徹底的なしつけで、自分からかける場合は、なるべく手短にするよううるさいくらい言われて育ったからである。しかし、家族、一人一人が自らの生活領域を形成することで家族とのコミュニケーションに新たなコストがかかってくるのは、現代家族の特徴のようである。

・このような家族観で育った息子は、この親子関係を肯定的に受け止めている

息子は、自分の家庭が一般の家庭からすると、かなり変わっていると認識している。座標軸がズレているという感じだが、そのズレは、進んだほうにズレていると回答している。高校までは義務教育という感じがあるが、その後は親の責任は果たしたということで、息子には自由にさせている。そこから先は、栄養失調になろうがどうしても、本人の自己責任の問題であるというのがこの上原家の方針である。この考え方に対して子供達は肯定的に評価している。

・現在はコミュニケーションスタイルはライフステージによって変わる

上原家のコミュニケーションスタイルは、家族のライフステージとともに変わるともとみている。今のコミュニケーションスタイルが変わるのは、家族が誰とどうコミュニケーションするかによって決まるという。家族であっても個人の生活は広がっており、もはや家族で一本の電話を共有する時代ではないと上原家では考えている。上原家の妻、洋子さんは、

「子どもに関して、親の知らないことがあることに不安な人間、管理的な立場に立つ人間にとっては、プライベート電話は困ったコミュニケーション手段と評価されるであろう。しかし、個人化の進んだ家庭では、程度の差はあると考えられるが、秘密をもっており、その時に使い分けられるコミュニケーション手段があるのは安心できる。」と言う。

つまり、家族の共有の電話にかかってくる電話は、それなりに家族全体を巻き込むことになるためである。

この家庭でのこれからの課題は、家族の緊急呼び出し手段である。家族がこれだけばらばらに行動していると、留守電とポケットベルだけでは用が足せなくなる可能性も高い。特に、親世代の高齢者を抱えており、緊急時の集合方法を決めておくことが課題となっている。このように生活スタ

イルの変化とともに今のコミュニケーションも徐々に変化するとみている。

②「パソコン通信家庭」杉原家の事例

・住環境と情報環境

埼玉県草加市に20年近く前に購入した一戸建てに住んでいる。3人の子どもたちはそれぞれ別の場所に離れて暮らしており、日頃は夫婦2人の生活である。電話1回線だけで、ファックスもない。先の上原家の場合と比べると家庭にある情報機器は、一般的な家庭に属する。

・パソコン通信との出会い

妻の恭子さんが、ワープロを習いはじめたきっかけは、娘の結婚、息子の就職などで家族が離れて暮らすようになったことである。ちょうど子育てから解放され、充実感のあるものを求めている時期とも重なった。

恭子さんは、子どもたちが家を離れた後、ひとまず子育ての責任は果たしたと思った。それまでが子育てに夢中だったので、ふと振り返るとこれといって趣味や楽しみを持っていなかった。また、恭子さんのつき合いの範囲は、近所づきあいが中心であり、なにかをして一緒に楽しむといった仲間は特にいなかった。そのため、子供が巣立った頃は、「空の巣症候群」になったと言う。

会社の経理畑にいた夫は、定年退職した後、会社の幹旋で週3日ほど、ある団体の経理をみる仕事をしている。休日には、二人で旅行することもあるが、会社一筋の仕事人間だった夫には、そういう生活が馴染まないようである。

そこで、なんとかずっと続けられて、共通の話題として適切なものがないかと考えていた時に、長女の婚約者からパソコン通信のおもしろさを教えられたのである。娘たちはつきあっている期間も、仕事の関係で離れている期間も長かったので、独身時代からよくパソコン通信で連絡を取り合っていた。夫は経理の仕事柄、コンピュータを使う

機会はあったのだが、妻はキーボードすら触ったことがなかったために、パソコン通信に関しても最初は不安のほうが強かった。しかし、思い切ってメーカーが主催するワープロ教室に夫婦で参加し、同じような夫婦に出会って、勇気づけられた。

その頃には、長女の結婚とその夫の転勤が決っており、離れても娘とパソコン通信によるメールをやり取りできるようにモデム内蔵のワープロを購入した。初めは画面を見ながらキーボードを打つことができずに苦勞したが、今では立派に電子メールが送れるようになった。

・パソコン通信が子どもとの交流を深める

長女に勧められて、ためしに始めたパソコン通信であるが、今では子どもたちとの交流に大いに活用している。

初めてメールを受け取った時、ラブレターを受け取る時よりも緊張したという恭子さんも、慣れてくるにつれて、パソコン通信の楽しみを分かるようになった。そして、今ではもう主人と一緒にあって、メールを見たり書いたり、趣味の情報をひきだしたり、フォーラムの意見を読んだり、いろいろな楽しみ方をしている。

次女には、妻の方からパソコン通信をするように勧め、結婚祝いに通信モデム付きのワープロを持たせた。その次女は、下の子が生まれたばかりでなかなか外に出られないので、妻や友だちとメールを交換できることをとても喜んでいる。次女の夫はオーストラリア、シンガポール、アメリカ、カナダなど海外出張が多く、長いときは1カ月くらい家を空ける。その間、出張先からパソコン通信でメールを送ってくるが、それは、メールは時差を気にしないで用件を伝えることができるし、国際電話よりお金もかからず便利であると評価しているからである。

新聞社に勤務している長男は、ワープロで原稿を書いたり、通信したりすることは日常の業務であり非常に手慣れているために、仕事の合間にメ

イルで近況報告をしてくる。長女は、子どもが幼稚園に行き始めてちょっと手が離れたので、自宅でパソコンを使う仕事をするかたわら、そのネットワークで知り合った母親たちと育児の悩みを相談したり、実際に外で会ったりして情報交換をしている。また、長女の夫は転勤が多い仕事であり、どこに行ってもパソコン通信で娘と連絡がとれるので便利である。

・パソコン通信で自らの世界もしだいに広がった
このようにしてパソコン通信の面白さに開眼した恭子さんは、コーラスの友達やお茶飲み友だちにも通信の面白さを吹聴した。子供達が親離れをしてしまって寂しがっている人も多く、妻のこの話を聞いてワープロを購入して通信を始める人も出てきた。また、主人の転勤で遠くに行かれる人との連絡にも便利であると評価している。

一般的にパソコン通信にのめり込むと電話料金が高くなると言われているが、妻が周囲の友達とパソコン通信をはじめてからの電話料金は逆に減っている。最初の頃は、アップロードやダウンロードの方法がよく分からなかったり、興味津々でいろんな情報をとったりしていたために、料金がかさんでいた。しかし、慣れとともに通信にかかる時間も短くなり、友達との長電話が少なくなったので電話料金がかからなくなったのである。それまで、昼間の暇な時間に電話で世間話等をしてきたのだが、今では素直に自分の気持ちを表現できるメールを楽しんでいる。

パソコン通信の楽しさと便利さを知ったために、妻は家族が離れ離れになった時でも、パソコン通信を通じて連絡を取り合えるので少しも淋しくないと恭子さん思っている。また、子供達に面と向かってなかなか言えないようなことでも、メールでは素直に伝えることができることを評価している。さらに、子供達から送られてきたメールを編集して、家族新聞を作ることまで考えている。

③情報化による家族形成

近代的な情報機器や情報家電を使って生活する二家族を紹介した。家族の形態が変わっても家族であり続けるための努力をしている家族の姿を示すものであろう。ここにあげた事例から情報機器が家族に与える影響を整理してみる。まず、第一に気づく点は、家族がそれぞれの個人としての生活の場を持つようになると家族とのコミュニケーションが希薄になるが、情報装置がそうした家族間のコミュニケーションを維持するのに有効に機能していることである。

家族が個人化するという事は、最初に紹介した多回線家族のように生活の中心に個人があり、家族は個人の生活の中の一つの選択肢として位置づけられているということである。そして家族が個人化していても多回線家庭のように家族関係は決して冷たい関係ではなく、むしろ情緒的に強い絆が形成されている。

成長して家を巣立った子どもたちとのコミュニケーションにパソコン通信という新しいメディアを使う杉原家は、遠くに離れて住むとどうしても疎遠になりがちな家族とパソコン通信で一緒に生活していたときはとはまた違った絆を築くことに成功している。多回線家族の上原家では個人化する家族を情報機器がしっかりとつなぎとめ、家族が個人として生活しやすいように配慮されていたが、離れて生活する以外に方法のない杉原家の場合は、情報機器が家族をつなぎとめる役割を担っている。

情報機器が家庭の人間関係に与えている影響をまとめると次の二つの機能があるのではないだろうか。一つはパソコン通信家庭に見たような「家族を結びつける機能」である。そして二つ目は「家族を個人化する機能」である。情報機器で家族間の緊密なネットワークを維持することが可能になったため、家族から離れた個人の生活領域を拡大したり、充実することで、結果的に家族を自立化させ、個人化を促すことになったのである。

家族は、共住、共食を通して同質性の高い組織を維持するものとして一般に考えられてきたが、上記の二事例をみる限り、こうした前提が無くとも、家族の人間関係は十分に形成されている。

(3) 情報化によって夫婦の役割分業を変えた事例

先の事例は、情報機器の中でも通信を家庭生活の中にうまく利用し、家族関係を維持させた事例である。次に、ハイテク情報機器を使って、現代家族の特徴である性別役割分業をスタイルを変えた家族の事例を紹介する。

①「重装備デュークス家庭」森家の事例

・住環境

長年のマンション暮らしから板橋区内に最近新築した夫婦共有名義の一戸建てに転居した。ライターである妻の仕事は一応フリーであるが、ほとんど毎日外出し、取材のためしばしば残業、出張もある。夫は事務機器会社の中間管理職で、新宿区内の会社まで通勤している。

自宅は、4LDKの間取りのうち、子どもたちがそれぞれ2階の1部屋ずつ専有し、1部屋は夫婦共有の仕事部屋兼書斎に使用している。一戸建て生活になり、長女が日中一人になるため、用心のためホームセキュリティシステムと契約している。

・情報環境

森家の情報環境は、充実している。電話回線は2回線あり、1回線は電話専用、もう1回線は、ファックス専用の回線となっている。電話は親子電話が入っており、親機1台、2階の各部屋に子機3台の構成である。さらに、妻専用のポケットベルが1台ある。

書斎には、デスクトップ型1台、ノート型1台の2台のパーソナルコンピュータがあり、近々さらにもう1台購入する予定がある。また上述のとおり新築と同時に防犯を目的としてホームセキュ

リティシステムとリース契約をしている。

・家事を楽しくこなす夫

夫の料理のレパートリーは充実しており、夫はだいたいなんでも作り、新しいものにも積極的である。森家では、だいたい週末は夫が料理を作ることが多い。平日でも前もって妻が仕事で遅くなると分かっているときは、夫が早く帰って、子どもたちに夕食を作る。こういう時も夫はハンバーグとかトンカツとか子どもの喜びそうなメニューを作る。妻も、ハウスホールド・ハズバンドとしての夫を高く評価している。

・家庭の外で活躍する夫婦を情報装置が支援する

この一家の仕事ぶりとは言えば、妻は出歩くことが多い。対照的に夫は、デスクワークが多く、土日は完全に休みとなる。夫婦間、家族間の連絡方法は、留守電、ポケットベル、ファックス、パソコン通信など、多様な方法で行われている。

妻は仕事が不規則である。土日に取材の予定が入り、留守にすることが多い。さらに自宅で原稿を書いたり、あるいは資料の関係で契約している会社のオフィスで書いたりする事も多い。その点夫は、土日は完全に休みになるため、土日の家事は夫が担当している。そのため妻は安心して仕事に出かけられると言っている。仕事が終わり帰宅すると、夫が夕食の支度をしており、感謝にたえない。夫が働き、妻が専業主婦をしている夫族の気持ちがよく分かると妻のりつ子さんは、答えている。よくフルタイムで働く主婦が、一番欲しいものとして専業主婦を挙げるが、森家は週末には「専業主夫」がいるようなものである。ただ、出かける時に、「今日は何時ごろになる？ごはんの都合があるから」と夫から聞かれることは、りつ子さんにとって面倒なことのようなのである。そのような時、りつ子さんは、思わず「ちょっとわかんない」とそっけなく答えてしまうという。

オフィスから家に連絡する場合は、会社の電話

を使って「これから帰る」というのも気恥ずかしいため、パソコン通信回線を介したファックス配信サービスを妻は利用している。仕事中に送っても目立たないし、留守番電話もあるが、子どもが留守番機能を解除したまま外に出かけることがあるため、もっぱらパソコン通信を介したファックスサービスに頼っている。

・家事を軽減するために実現したハイテク情報装置

森家は、情報装置や情報システムを駆使した、いわばハイテク重装備型空間である。なるべく家事の負担を減らし、家族が快適に過ごすために、こうしたあり方にたどりついたという。食器洗機、浴室乾燥機は、家を建てる時に組み込んでおり、今のエコロジーに逆行するような資源多消費型の生活を行っている。浴室乾燥であれば、風呂場もからっと乾燥して掃除の手間も省け、天気を気にせず外出できる。共働きの夫婦が忙しい中、時間を作るための努力が家庭の情報化であるとみている。ホームセキュリティとのリース契約も、共働き夫婦で至らない部分を情報装置で補うという発想からである。

・性別役割分業を超えた生活

書斎にあるコンピュータは夫婦2人で共有している。そんなに利用が重複することはないが、重なった場合は、互いに時間を分け合う方法をとっている。つまり、どちらかがパソコンを使っている場合、片方が食事の支度をすると言う具合である。りつ子さんは言う。「お互いに得意分野があるでしょ。たとえば、彼のほうが魚の下ごしらえがうまいとか、煮物はやはり私とか。すると最初に彼がひととおり魚や野菜のしたごしらえをしておいて、それから交代。コンピュータはフロッピーで保存しておけばいつでも再開できるし。逆に、ワープロの操作や文章作法に関しては私のほうが年季が入っているから、ちょっとした編集の工夫

をアドバイスしたり、彼が打った原稿を校閲したり。」と性別役割分業では無く、性別を超えた分業生活を強調する。

ワープロやコンピュータはもちろん家電もいまはコンピュータが組み込まれており、いわば情報機器とハイテク家電と呼ぶことができる。大抵はボタン一つで操作できるようになっており、男だろうが女だろうが関係なく使いこなせる。そういう意味では、森家の夫婦は両性具有的になっているとも言えよう。夫も妻も役割交換したのではなく、夫婦ともどちらの役割も分担できる能力を備えたということである。りつ子さんは「こんなに家庭内相互乗入れしているのに、家事・育児はオンナがすべきだというのは、もはや幻想にしかすぎないんじゃない？」と性別役割分業について冷ややかに見ている。

この森家も結婚当初からこういった夫婦関係ではなかった。子どもが小さい頃は、夫も現場の仕事が多く、多忙を極めており家事・育児の負担はほとんど妻のりつ子さんにかかっていた。保育園の送り迎えも、延べ7年間くらいりつ子さんが働きながらこなしてきた。この状況から抜け出したのは、夫が家事・育児に徐々に乗り入れてきてからである。

夫が家事に妻が仕事にお互いが乗り入れることで、おもしろいことがおきたりりつ子さんは言っている。「夫と子どもとの接触時間が相対的に増えてくると、夫は子どもにも細々と注意するようになり、社会的役割としてのという意味で“母親”的になってきて、私の方は接触時間が短くなり、まあ、細かいことはいいかみたいな感じで、おおらかになってくる。」言い換えるならば、妻のりつ子さんの父親化が進み、夫の母親化が進んでいるのである。

・森さんは自分たちの家族を“ブロック・ファミリー”と呼んでいる

「私たちって、子どものおもちゃのブロックみ

たいな感じ。一つ一つの単位はあるけれど、それ自体の役割や機能は固定されていないで、そのときどきにに応じてどんなふうにも変形できるでしょ。これからもどんなふうになるか分からないけれど、少なくともメタモルフォーゼしながら柔軟に対応していけると思うの。そのために、情報機器や情報家電はとても大きな役割を果たしてくれるように思う。」とりつ子さんは言う。

家事の代行は、かつて家政婦などに依存する以外に無かった。しかし、これからはそのような意味での労働集約的な方向だけではなく、情報機器や情報家電を活用する方向に進む可能性が高い。それによって、家事が単なる拘束や義務ではなく、趣味の領域にも入り、夫婦相互が家事をするようになる可能性が高い。ここに紹介した森家はまさに情報機器、情報家電を使い夫婦がお互いの役割に乗り入れた先進的な家族の事例と言えよう。

②情報機器によって再編された家族関係

ハイテク機器で重装備された共働き家庭である森家の生活を振り返ると、家庭を顧みる時間の少ないサラリーマンでありながら、情報家電による家事の徹底した合理化と情報機器による家族の情報ネットワーク化によって夫婦で共に働き、共に家事・育児をする家族を実現している。夫は家事と育児に、妻は仕事に相互乗り入れをし、夫が妻の役割をこなし、妻が夫の役割をこなすこの家庭は性別役割分業と呼ばれるこれまでの家族のあり方を根本から問い直す家族である。全自動洗濯機、自動食器洗機と家事の苦手な人もハイテク家電によって家事の負担は相当軽減できる。家族の個人化が進む中で家事をする夫の出現はもはやそれほど驚くべき事ではなくなっている。

情報機器とホームセキュリティシステムや食器洗い機などの情報家電やハイテク家電を使うことで、夫婦の性別役割分業関係から一歩踏み出した家族づくりとして評価できよう。そして結果的に従来の家族観を払拭する家族を再構築しており、

その際に情報装置が果たす役割はきわめて大きいと言えよう。

(4) 情報化によって家族が変質した事例

共住、共食していても家族間にコミュニケーションが無ければ、家族関係は形成されない。上の事例では、情報機器が個別に生活する家族をつなぐ装置として機能していたが、次に紹介する事例は、その逆である。一つは情報化によって夫婦のコミュニケーションが壊れた事例、もう一つは、個人化する情報機器によって夫婦関係が崩壊した事例である。

①「SE ディンクス家庭」庄司家の事例

・住環境

浦和市の共有名義の分譲マンションに住んでいる。妻は都内ソフトウェア会社で、パッケージソフトの商品開発にかかわる。夫はコンピュータ会社の管理職で、首都圏近郊の会社まで遠距離通勤をしている。3LDKの間取りであるが、子供がいないため、それぞれ1部屋ずつ自分専用の部屋を確保している。夫の書斎は、コンピュータ端末、仕事関係の本、書類、雑誌などで足の踏み場もないほどである。妻の部屋は、自宅ではいっさい仕事はしない主義のため、趣味の皮細工やエレクtron演奏のためのスペースになっている。

・情報環境

電話は1回線で、ファックスはない。夫の部屋には、デスクトップ型のパソコンが2台、ノート型が1台と、合計端末3台が備え付けてある。

・庄司家の日常生活と情報化

現在、彼女はパッケージ・ソフトの商品開発にかかわり、企画から、システムづくり、アプリケーション、商品化のところまでひととおり全部の仕事をこなしている。

・アフターファイブの使い方がまったく異なる夫婦

夫婦ともにシステム・エンジニアであり、フレックスタイム制の仕事状況は似ているが、会社を出た後の時間の使い方は対照的である。会社は完全フレックスタイム制でコアタイムもなく、勤務状況を管理する人もいないが、妻は、自主的に勤務時間を10時から6時までと決めている。この勤務時間帯は、女性の中では一番遅い方に属する。コンピュータのソフトウェアに関しては、男女差は問題ではなく能力次第であるので、子供のいる女性も多く、平均年齢もかなり高い。

妻の帰宅時間は、たいてい7時過ぎである。ただ、週に1回は英会話のレッスンがあるし、独身や子どものいない女友達と夕食を食べたりする時は、遅くなることもある。夫の帰宅は、9時から11時の間だから、まっすぐ帰れば十分食事の支度ができる。家事は、ほとんど妻が請け負っているが、一時期に比べると、夫の方も料理や洗濯をするようになった。ただ、子供がいないから、妻の負担はそれ程大きくはない。

夫は、帰宅すると真っ先にコンピュータのスイッチを入れ、食事の後はたいてい1時間くらいは書斎で端末と向かい合っている。夫は、そこで会社から自分あてに送った仕事の続きをやったり、メールの整理をしたりしているのである。メールのやりとりは全部英語である。現在、夫は管理職的な立場上、勤務時間中は好きなようにコンピュータを動かすことができない。もともとコンピュータが好きな夫にとってみれば、会社でコンピュータを使えない分、家の中で思い通りにコンピュータを使えることはストレス解消になるのだと妻は見ている。

それに対して、妻の方は一日中好きなだけコンピュータにさわっているから、家にはいっさい仕事を持ち込まない。すると言えば、たまに麻雀ゲームをするくらいのものである。妻は、会社でコンピュータを使っているのだから、家に帰ってまでコン

ピュータで仕事や通信をしたいと思わないのである。

・書斎専用の一部屋は完全にコンピュータ・ルーム化している

6畳ほどのスペースの書斎はほとんど夫の聖域である。書斎にはパソコンが3台、外づけドライブ、CD-ROM、その他いろいろなソフトが所狭しと置いてある。また、夫は何年も前から毎月コンピュータ関係の雑誌を外国雑誌も含めて6、7冊を購読しているのだが、1冊も捨てずに全て保存している。その雑誌の保存スペースは、書斎の片側の壁面全部を使った作り付けのキャビネットなのであるが、下から上まで2列に押し込んでも入りきらないのである。

夫はソフトを買うのが大好きで、新しいソフトが出るたびに試してみたいのか、通信販売で購入している。しかし、夫はソフトをコピーしないで、必ず購入することに対して妻は夫を潔癖であると評価している。夫は海外からもよくソフトを購入しているが、夫の口座から引き落とされるので、正確なことはわからないが、妻の推測では月に最低数万は下らないようである。

通勤地が郊外に代わった当初は、夫はノート型パソコンを持って通勤していたこともあったが、必ず座れるかどうか分からないし、さすがに疲れるといって、今はほとんど持参していない。海外出張のときなどは持っていき、会議の速報をその日のうちに本社あてに送る通信などに使っている。

普段そのような生活をしている夫は、週末、朝起きて一番にコンピュータのスイッチを入れた後一日中書斎にこもっていることもある。このような夫を持つ妻は自分を“パソコン・ウィドウ”と称している。もっとも夫の方も終日書斎に閉じ込められているわけではなく、頻繁に出入りするのだから、会話も多く、コミュニケーションがないわけではない。

夫がコンピュータを使うことによって、いくつか弊害が生じているようだが、妻は何とか対応している。まず、端末の操作の音や通信の接続音のために隣の部屋で夜眠ることができない時は、妻は他の部屋に避難することにしている。それから、夫が夜通信している時は、一回線しかないので電話が使えないが、子供がいないから差し迫って電話を使わなければならないということもないので、妻は回線を増やすつもりはないと答えている。

②「携帯電話家庭」加藤家の事例

・住環境

第四山の手地域と呼ばれる横浜市に築かれたニュータウンの分譲テラスハウスを10年ほど前に購入し、住んでいる。夫は主として建築デザインを手がけるデザイナーで、新宿に事務所をもち、スタッフ数人を抱える。仕事の締め切りが迫ると、寝泊まりすることもザラで、事務所のある同じマンションの一室を宿泊用に購入している。妻は銀座の運輸関係の会社にフルタイムで勤務している。平日の日中は、家の中にはほとんど誰もいないという居住環境である。

・情報環境

電話1回線で親機1台と子機が2台ある。ファックスあり。最近息子にせがまれてパソコンを購入した。夫は常に携帯電話を持ち歩いている。

・加藤家の日常生活と情報化

(a) 夫の主張

家にも落ち着かず、わびしいという気持ちが湧いてくる夫は、いつも通り仕事場のマンションへ帰る日々が続いている。家へ帰りたくない、というのが夫の今の率直な心境である。この間も、友人と飲んだ帰り、タクシーを拾って友人を先におろした後、一度は家に帰ろうと思ったのだが、どうしても気が進まずに、仕事場のマンションへ帰ったのである。最近、仕事場のマンションの

部屋にいるほうが、家族といるより落ち着くということだ。

夫は今家の中に自分の居場所がないという感覚に見舞われている。たまに10時すぎに帰っても、朝の早い妻は既に寝ているし、息子も娘もそれぞれ自分の部屋にこもって出てこない。一人でお茶漬け食べて寝るのもわびしいために、遅くなるとつついなじみの店で食事をすませて、仕事場のマンションに帰る。そんな生活パターンがかなり長い間続いている。

・冷える夫婦関係

大企業に勤める妻との関係は、子育てという共通のハードルがなくなった頃から冷え始め、今では一人の方が気が休まるようになっている。事務所を経営するというのは、スタッフの給料から家賃の心配、仕事の手配まで考えなくてはならず、一般的に想像されている以上に神経をすり減らすものであると夫は訴えている。特に今のように不景気だと、夫が経営しているような中小企業は本当に厳しいようである。それは、妻のように大企業に勤めている立場とは決定的に違うために、妻には夫の苦勞が分かっていないと夫は思っている。仕事で神経がぐたくたになっている上に、家に帰ってまで、気の強い妻とやりあう気は夫の方には全くない。夫にしてみれば、玄関で三つ指ついて迎えるときまではいかなくとも、せめてもう少し可愛い妻であって欲しいようである。

妻は仕事にも家事にも、いっさい手を抜かない性格で何でもこなしてしまう。子供が小さい頃は、保育園の送り迎えでお互い大変な思いをしてきた。夫からすると、当時は自分も子供の送り迎えにできる限り協力したし、子供の世話もしてきたつもりなのである。

二人にとって子育て期は非常に辛かったのだが、夫婦にとって共通のハードルであったので一緒に暮らしてこれたのだと思っている。

・携帯電話が秘密の電話と変わる

夫は仕事柄、移動することが多く、ストレス解消の意味もあり車を移動手段として使っている。移動中の連絡方法は携帯電話を利用しているが、この携帯電話は発信専用で、現在は仕事の連絡と現在つき合っている女性との連絡に使うのみである。

仕事でいろいろな会社やデザイン事務所との打ち合せやアンテナショップを見に行ったりすることが多いために、移動が非常に多い。また、もともと車が好きであるために、都内を車で移動するのは効率が悪いが、たいていのところは自分で車を運転していく。夫にとってはこれがストレス解消法なのである。移動中の連絡方法としては、かなり早い時期から、携帯電話を使っている。夫は車で移動する時以外にも、出張も多いので、携帯電話はいつも持ち歩いている。

ただし、この電話の番号を知っているのは事務所の秘書的な役割をしているスタッフと、いまつきあっている女性だけあり、秘書にも緊急時以外はかけないように厳命しているので、この電話は発信専用である。夫にとって、都合の良い時に自分から一方的に連絡する以外は、相手から連絡されるのは不愉快なのである。その代わりに、移動中は定時に事務所に連絡を入れるようにしている。もちろん、妻はこの電話のことを知らない。

夫が今の彼女と知り合ったのは、あるアンテナショップで、夫がショップの建築デザインを、彼女がインテリア小物を担当したことがきっかけである。それから時々一緒に飲みに行くようになり、つき合いが始まったようである。その頃、もう夫婦仲も倦怠期とも言うべきか、互いに無関心になっていたため、どちらが先か後かという問題ではないと夫自身感じている。

デートの連絡は、もっぱら携帯電話を使っている。この番号は彼女には教えてあるので、都合の良い時に電話してくるし、夫の方からも頃合を見計らって電話するという状況にある。携帯電話は

夫にとって非常に使い勝手が良いのだが、最近はどこでどう盗聴されているか分からなため、盗聴されたことによって面倒なことになっても困る。そこで、しばらく前から秘話機能のある機種に代えている。少し後ろの部分がでっばっているためにかさばるが、モードを切り替えるだけで盗聴ができにくくなるスクランブル機能が働くというのは非常に助かるようである。

・夫は離婚は考えていない

彼女との関係は一時的な関係で、結婚はしないつもりである。ただ、夜人恋しい時は妻ではなく彼女と連絡をし合っている。しかし、老後は妻と一緒に暮らすつもりでいる。夫は、妻と離婚してまで彼女と結婚するつもりはない。結婚するほどのエネルギーもないし、彼女とは時々会って遊ぶくらいが丁度良いと考えている。彼女も結婚願望はないと夫は見ている。このような二人の関係をコンビニ関係と夫は称している。

一人で仕事場のマンションに泊まると、夫は深夜人恋しくなることがある。しかし、頭を下げてまで妻の機嫌をとる気はなく、携帯電話で彼女に電話するのである。連絡がとれない時は、留守番電話にメッセージを吹き込んでおいて、後で彼女の方から電話してもらおうのである。この部屋のことは妻は知っているが、電話はついていないことになっているので、彼女と電話で連絡をとっても問題ないのである。ただ、夫は夫婦共同名義で購入したその部屋に女性を決して入れない。それが、夫のモラルということである。

夫にとっても子供が小さい頃はやはりかわいかったようである。今でも、かわいく思うし、親として気にはなっているのだが、家庭は崩壊し、妻と別れても仕方ないと思っている夫にとっては、もうどうでも良いことになっている。しかし、老後一人で過ごすのは寂しいので、結局今の妻と一緒に暮らすことになるのかと夫は思っている。さらに、夫は妻には自分しかいないと思っているの

である。

(b) 妻の主張

・夫への信頼感は失墜している

夫は会社中心で、家庭をかえりみない人であるから妻は夫に何も頼ろうとしない。自分で会社を経営することと大企業の組織の中で働くことは違うと考えている夫に、妻は憤りを感じている。家族がどんな状況であろうと接待ゴルフを優先させるような夫には、いっさい何も頼らないと妻は決めている。今まで何度となく裏切られているために、妻は夫を頼りにしないですべて自分でやっている。妻にとっては夫に可愛くないと言われても、自分を変えていこうという気はもうないのである。

自分で会社を経営するとストレスがたまるといふ夫の意見には妻は賛同していない。妻にとってみれば、仕事をしてストレスがたまるのは、自営だろうが組織だろうが同じなのである。ところが夫にはそれがどうしても理解できない。妻は大企業に勤めているから組織の歯車の一員で、妻がいなくても仕事は順調に動くと思っているが、責任ある立場に就くと仕事が大変になるのは、自営も組織も同じであると妻は考えている。しかし、子供が病気になると休むのは、必ず妻の方であり、家事や育児も妻がこなしている。このような状況に妻は納得できずに、苛々はつもの一方である。

・家庭での心の支えを喪失した妻

妻が勤める会社は、男性上位の会社であるので、妻のストレスはますます溜まる一方である。妻が勤める大企業は、歴然とした男性上位組織で、彼女のように高卒女性は20年以上勤めても、給料、昇進ともに同期の男性の6割程度であり、新しい社員のもらう給料が妻の給料をすぐに抜いてしまうのである。このような状況の中で妻が感じているストレスは夫には理解できないだろうからと、妻は夫には全く愚痴はこぼさない。夫に相談しても、解決できないどころか、怒鳴られるのが妻に

は分かるのである。

・共住、共食関係が崩れ、夫婦関係も崩れ出す

最初の頃は、夫も育児に参加してくれてはいたが、自分の事務所を持つようになってから、次第に家を空けるようになってきた。妻も仕事しながら育児をこなしているために、夫のことまで気が回らなくなり、すれ違いの生活が続いている。

保育園に子供が通っている頃は、デザイン家としてはまだあまり有名ではなかった夫は、家で仕事をしていたこともあり、保育園の送り迎えなどは幾分していたようである。しかし、自分で事務所を持ち、スタッフも何人か抱えるようになって、家を空けることが多くなる等だんだん変わってきたのである。夫は金曜日の夜などは帰ってこないようである。

妻の方も、朝は5時過ぎに起きて、子供の弁当、朝食から夕食の支度までいっさいの家事をしてから出勤し、昼間は仕事に忙殺され、夕食の片付けが終わる頃には疲労困憊で、10時過ぎには、倒れ込むようなかたちで寝てしまっている。夫は食事を家でするのかどうかの意志表示なく帰ってくるので、妻は食事を作っていない。そのことが夫には不満であるようだが、妻からしてみると、夫が予め意志表示をすべきであるという立場に立っている。

・仕事も遊びも夫婦別々の世界で楽しむ夫婦

現在は夫婦それぞれにストレス発散方法を見つけ、お互いに楽しんでいる。妻はカラオケで知り合った会社の後輩社員と意気投合して、デートを重ねている。夫は外で飲んだり、遊んだりして、ストレス発散させてことができるが、働く女性は、そんなに飲み歩くわけではないので、子供が小さい頃は、妻は非常にイライラしていたようである。しかし、子供が中学生になりそれほど手がかからなくなり、妻も時々夜遊びできるようになったのである。ちょうどその頃、カラオケのおもしろ

さに開眼した妻は、会社の帰りに同僚と行ったり、週末に地域の友だちと行ったり楽しんでいる。

カラオケの楽しみを知って時々足を運ぶようになった頃、妻は偶然会社の若い人とカラオケルームで一緒になり、意気投合した。それ以後、時々飲みに行ったり、カラオケに行ったりしている。男女交際にはとりわけ厳しい保守的な会社であるだけに、社内で誤解されると、妻も部下を持つ立場上困るので、お互いの連絡方法は最近ではもっぱら社内パソコン通信を使っている。妻は総務関係で、パソコンの操作には慣れているし、彼も部署は違うが、よく端末を使うので、連絡方法としては最適なのである。この方法を思いついたのは、妻が偶然読んだ新聞にそのようなことが秘かに流行っているという記事が掲載されていたからである。

・妻の心は夫から完全に離れている

夫との関係は、修復できない段階にまできている。子供達も、口うるさい夫を嫌がっているので、別れても仕方ないと思っている。子供達が独立した後に現在の夫と一緒に暮らすことは、妻には想像がつかないことである。

③現代家族が直面する危機

上記の二家族の事例は、夫婦関係、家族関係が変化する中で、情報機器が家族の求心力を強める方向に機能せずに、反対に弱める方向に機能したものである。先に紹介したSEディンクス家庭は、情報機器の高度化によって、家庭と職場の境界線が無くなり、家庭における夫婦間コミュニケーションの時間が奪われ、妻をコンピュータウィドウにしまった。携帯電話家庭は、家族が知らない情報機器を夫が仕事で持ったことによって、家族以外の人とのコミュニケーションが手軽になり、その結果、冷えかけた夫婦関係を完全に崩壊させてしまった。

このように、仕事や家族のために使った情報機

器が、共住、共食の機会が少ない現代の家庭に入り込み、さらに家族間の少ないコミュニケーションの場を奪う結果となっている。情報機器を使おうとする背景には、仕事や家族とのコミュニケーションを円滑にすることを目的としているが、パーソナルユース化する情報機器は、家族内の歯車がズレはじめると急速に家族をバラバラにする力を持つ道具にもなることがわかる。

3. 家庭内の情報化による現代家族への影響

家族とともに食事をし、生活することが当たり前前で無くなった現代家族の生活において、情報機器が家族をつなぐ重要な役割を果たしていることが事例から明らかになった。上記の事例から情報機器が、家族の人間関係にどのような影響を与えているかを整理する。

まず、第一に気づく点は、家族がそれぞれの個人としての生活の場を持つようになると家族とのコミュニケーションが希薄になるが、情報機器がそうした家族間のコミュニケーションを維持するのに有効に機能していることである。成長して家を巣立った子どもたちとのコミュニケーションにパソコン通信を利用する杉原家、個人で活躍する家族を留守番電話、ポケットベルなどの情報機器がしっかりとつなぎとめていた上原家ともに家族の状況は異なるが、情報機器が家族をつなぎとめる役割をしていた。

重装備デュークス家庭である森家の生活を振り返ると、家庭を顧みる時間の少ないサラリーマンでありながら、情報家電とハイテク家電による家事の徹底した合理化と情報機器による家族の情報ネットワーク化によって夫婦で共に働き、共に家事・育児をする家族を実現している。夫は家事と育児に、妻は仕事に相互乗り入れをし、夫が妻の役割をこなし、妻が夫の役割をこなすこの家庭は性別役割分業と呼ばれるこれまでの家族のあり方を根本から問い直す家族である。全自動洗濯機、自動食器洗機と家事の苦手な人も情報家電によっ

て家事の負担は相当軽減できる。家族の個人化が進む中で家事をする夫の出現はもはやそれほど驚くべき事ではなくなっている。

情報機器が家庭の人間関係に与えている影響をまとめると次の三つの機能があるのではないだろうか。一つはパソコン通信家庭に見たような「家族を結びつける機能」である。そして二つ目は「家族を個人化する機能」である。この機能は、情報機器で家族間の緊密なネットワークを維持することが可能なため、安心して家族から離れて、個人の生活領域を拡大したり、充実させることが可能になったため結果的に家族を自立化させ、個人化を促すことになったのである。三つ目は情報機器とホームセキュリティシステムや食器洗い機などのハイテク機器と情報家電を使うことことで、夫婦の性別役割分業が事実上形骸化し、結果的に従来の家族観を払拭する「家族を再構築する機能」である。

そして、この三つの機能とは別に情報機器は、使い方によっては家族関係を維持する方向ではなく、全く逆の家族をバラバラにする方向に機能する危険性をはらんでいる。共住、共食という生活が難しくなっている現代では、家族がまとまろうとする努力を怠れば、家族関係がバラバラになる危険性が高い。

本格的な情報化社会を演出する情報機器類の普及は、まだ緒についたところである。ポスト共住・共食時代の家族コミュニケーションを支える装置として、これらの情報機器は、極めて大きな可能性を持っているが、それだけに使う側の家族の方に、その方向を誤らないしっかりとしたマネジメント観が求められてこよう。

注(1)：「サラリーマンの仕事と家庭」の調査概要は以下の通りである。

調査方法：首都圏に住む大企業ホワイトカラー・サラリーマン夫婦 500 組に対するアンケート調査及び大企業 10 社に対するヒアリング調査

調査時期：アンケート調査 1993 年 7 月～8 月、ヒアリング調査 1993 年 10 月～12 月

注(2)：ここに掲載した作文は、「子どもの目を通して見た家族像」から抜粋したものである。調査概要は以下の通りである。

調査対象：東京都の作文教室に通う小学 1 年生から高校 3 年生までの子ども

調査内容：住みたい家に関する絵、日常生活の写真、家族、父母をテーマとした作文

調査時期：1993 年 5 月～10 月

注(3)：「都市の家族とパーソナル・ネットワーク」の調査概要は次の通りである。

調査方法：朝霞市及び山形市に住む夫の年齢が満 20 歳から 65 歳までの夫婦 855 組に対するアンケート調査及び両市に住む夫の年齢 40 代と 60 代の夫婦に対するインタビュー調査

調査時期：アンケート調査 1993 年 6 月 10 日～7 月 4 日、インタビュー調査 1993 年 11 月

注(4)：本調査の調査概要は以下の通りである。なお、本稿に紹介する家族の事例は、回答者のプライバシーを守るため全体の文脈を損なわない範囲で、固有名詞、職業、個人情報を変えている。

調査方法：情報化の進んだ 10 家庭を対象とするディプスイインタビュー調査及び首都圏及び関西圏に住む満 20 歳以上の男女個人 609 名を対象とした自由記述式アンケート調査

調査時期：アンケート調査 1993 年 9 月 1 日～10 月 1 日、インタビュー調査 1993 年 7 月

主要参考文献・資料

1. 井上忠司『「家族」という風景』NHK ブックス 558 日本放送出版協会 1988年
2. 井上忠司・石毛直道『食事作法の思想』ドメス出版 1990年
3. 石毛直道・井上忠司『現代日本における家庭と食卓－銘々膳からチャブ台へ－』
国立民族博物館研究報告別冊 16号 1991年
4. 上野千鶴子ほか編『シリーズ変貌する家族1～8』岩波書店 1991年
5. 奥野卓司『パソコン少年のコスモロジー』筑摩書房 1990年
6. 奥野卓司『情報人類学』ジャストシステム 1993年
7. 落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣 1994年
8. 富田英典『声のオデッセイ』恒屋社厚生閣 1994年
9. 名和小太郎『電子メディアの交際術』勁草書房 1991年
10. ニッセイ基礎研究所『日本の家族はどう変わったのか』日本放送出版協会 1994年
11. 野々山久也『高度情報化社会における家族のライフサイクルに関する総合研究』報告書 1991年
12. 正岡寛司・望月嵩編『現代家族論』有斐閣 1988年
13. 目黒依子『個人化する家族』勁草書房 1987年
14. 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸『メディアとしての電話』弘文堂 1992年